

クリスマスイブの夜とは言え、賑やかなイルミネーションのない住宅地の夜道は人の顔も見分けられない夕闇がおりています。横浜港南台教会の賛美礼拝ではお嫁ちゃんのるり子さんが司式を担当することになっています。優しい温和不いつもの口調で、心を含めて堂々と司式することを心待ちにして暗い夜道を教会へと急ぎました。

教会の玄関ロビーでは、にこやかな笑顔が勢ぞろいでお出迎えてくれました。受付記入名簿は以前は男女別々の用紙が用意されていましたし、子どもの数も別に報告していましたので、受付者は名簿をよく見て、それぞれの数を数えたものでした。今年度からは性別不問の用紙になっていて、報告も全体数を記すことになっています。大人も子どもも、男も女も LGBT もいづれをも問わず、ひとりの人間として平等に数えることになっています。合計数を問う場合はこれで十分ですが、それぞれの生き方が問われる場合には、年齢、性差、違いを相互に受容することが大切でしょう。



礼拝前に談話室にいた若いママから声をかけられました。胸にすやすやと眠る坊やを抱いていました。この坊やは、3人目として、この夏生まれたばかりの坊やで、初めてのクリスマスイブ賛美礼拝参加とのことでした。傍で遊んでいた3歳になる彼のお姉ちゃんがしっかりした態度で、「もう幼稚園にいつているの！お兄ちゃんも！」と報告してくれました。クリスマスに

「聖母子像」のような可愛い坊やを抱いたママに会えるなんて、なんという喜びでしょう。やがて電灯がフェードアウトして、お姉ちゃんはびっくり！「お兄ちゃんは大丈夫かしら？」と、ママと一緒に安心しながらも、お兄ちゃんを気遣っていました。本当に子どもって可愛いものです。

礼拝堂に入り、席に着くとすぐにカリヨンの音が静かになり始めました。この音は会員の石崎さんがノートルダム寺院のカリヨンを細心の注意を払って録音したものです。るり子さんが司式の講壇につきました。招詞を朗読し、聖歌隊が「キリストは明日おいでになる」を賛美します。この讃美歌はパナマ生まれ、ジャマイカ育ちのドーリーン・ポッターが作曲した讃美歌で、Eマイナー、アウフタクトで、うねりが感じられる素敵な曲です。歌詞も低き所に下られた主を迎えるという意味合いが強く感じられます。賛美と共に小さいキャンドル型のランプが配られましたが、光が弱く何の役にも立ちません。天井の電灯がフェードインしました。輝く蝋燭の火を見つめつつ捧げた礼拝が懐かしく感じられてなりません。会衆は賛美歌を5曲歌いました。「主を待ち望むアドヴェント」は子ども讃美歌ですが、残りは独、英、米の作家による昔ながらのおなじみの定番クリスマス讃美歌でした。嬉しいながらも、短時間に5曲を歌うことは高齢者の私には至難となってきました。

この夜のメッセージはマタイによる福音書のクリスマス物語からでした。星に導かれて占星術の学者と言われるマギたちが新しい王の誕生を祝いにやって来た。彼らが捧げた贈り物はキリストの生涯を象徴する黄金(王)、乳香(祭司)、没薬(贖い主)である。彼らは最初間違えてヘロデ大王を訪ね、悲劇を招いた。この世の力による支配とは相いれないキリストの生涯を象徴している。その中で神は無名の庶民ヨセフ、マリアをキリストの御用に用いられたと語られました。



礼拝が終わった時に、先ほどの坊やのおばあちゃまが、礼拝に来られなかった夫のためにプレゼントを下さいました。家に帰って開けてみると、クリスマスオーナメントセットでした。なんと和三盆です。雪の結晶、星、トナカイ、サンタクロース、もみの木、ベル、ヒイラギです。うれしい、楽しい、クリスマス！リンリン、カンカン、クリスマス！